

論文内容の要旨

報告番号		氏名	池下 克実
Profiling Psychiatric Inpatient Suicide Attempts in Japan (日本における精神科入院患者の自殺企図の特徴)			

論文内容の要旨

日本における自殺者数は1998年以降14年間にわたり年間3万人を超え、2012年以降は3万人を下回ったものの依然として高い自殺死亡率が続いている。自殺で亡くなったものの90%以上は生前に何らかの精神疾患に罹患していたことは多くの研究で報告されており、精神疾患の罹患は自殺の重要な危険因子であるといわれている。また精神科入院患者は自殺の危険性が高いという報告があり、アメリカの第3者医療施設評価認証機構(The Joint Commission)の医療事故報告制度において自殺事故が病院内の重大事故件数として2番目に多いことが明らかにされている。しかし我が国では病院内の自殺事故の実態はほとんど明らかにされていない。今回我々は奈良県内の精神病棟における入院患者の自殺の実態を把握するとともに、その特徴を分析し自殺防止対策について検討した。

奈良県保健予防課に提出された精神病棟において発生した自殺事故の報告書をもとに後方視的に年齢、性別、精神科診断、自殺手段、事故発生時間、発生場所、転帰などについて情報を収集した。結果、11年間で35件の自殺企図が報告された。それらの転帰は不明1件を除き、28件が既遂(死亡)し、6件は未遂であったが植物状態や認知機能障害などの重篤な後遺症を残した。男女比は3:2で男性が多く、平均年齢は50.5歳であった。精神科診断については、統合失調症(51.4%)、気分障害(40%)の順に多く、自殺企図の発生時間は夜間(20時~8時)(31%)に比して日中(8時~20時)(66%)に多く認められた。また病院内で発生した自殺企図19件においても日中の自殺企図(58%)が夜間の発生(42%)を上回った。病院外で発生した16件の自殺企図のうち11件は外出または外泊中に起こり、5件は離院した後に発生した。院外で認められた自殺企図においても75%が日中に発生した。自殺企図手段では縊首(60%)が最も多く、次いで電車等への飛び込み(14.3%)、高所からの飛び降り(11.4%)であった。院内の自殺企図においては縊首によるものが約8割と高い割合を示した。縊首に用いた物品としてドアノブやベッド柵にタオルやベルトを掛ける方法が用いられ、これは閉鎖病棟でも入手可能な物品を用いており病室内での自殺企図手段として多く認められた。一方、院外の企図において縊首は37.5%に留まり、飛び込み(31.3%)、飛び降り(18.8%)等の手段も多くみられた。

これらの結果において男女の割合、精神科診断、手段に関して欧米の先行研究と類似する結果を示し、統合失調症や気分障害は自殺企図の危険因子として重要であることが確認された。また精神科入院患者の自殺企図は病院スタッフ数が減少する夜勤帯に多く発生するという予測に反して、日中に多く発生することがわかった。また特に院内の自殺企図手段は病室内での縊首が多いことが確認され、スタッフ数が多い日勤帯においても病室内の自殺企図に十分注意した観察が必要であり、病棟内でも容易に入手できるタオルやベルトなどの持ち物にも注意を払い、それらを掛けることができる器具を可能な範囲で除去することにより入院患者の自殺企図を減らせる可能性が示唆された。